

P-445 妊娠中に発症したリンパ腫型成人T細胞性白血病(ATL)の一例大阪市立総合医療センター¹, 川端産婦人科²中村博昭¹, 本久智賀¹, 川端政實², 康 文豪¹, 中本 収¹, 松尾重樹¹, 松本雅彦¹

ATL キャリア妊婦は約0.2%に見られるが, すべての ATL キャリアのうち生存中に発症に至るのは約5%といわれる。予後不良な疾患であるが, 通常50-60歳代に好発し, 妊娠中の発症は極めて稀である。今回妊娠中にリンパ腫型 ATL を発症し, 診断に苦慮した症例を経験したので報告する。(症例) 34歳, 1経妊1経産, ATL キャリアであるが他に既往歴を認めず。妊娠24週頃より口内炎, 25週より発熱, 歯肉炎, 頸部リンパ節腫脹を認め, 26週5日入院となった。感染を疑い抗生剤, ガンマグロブリンを投与するも, 感染源は特定できず, 症状も軽快しなかった。喀痰結核菌培養は陰性。咽頭細菌培養にて *Candida albicans* が検出され, 嚥口瘡の診断にて, アムホテリシン B の全身・局所投与を行ったが症状は軽減しなかった。ツ反陰性, IgG: 753mg/dl と低値を示したことから, 細胞性免疫, 液性免疫の低下が考えられた。当初より ATL の発症も疑われたが, 異型リンパ球(-)で, 白血病型の ATL は否定された。しかし妊娠28週5日の検査所見で, 可溶性 IL-2レセプター: 2500 U/ml, CD4: 77.3%, CD25: 36.4% と高値を示し, ATL の発症が強く疑われたため, 妊娠30週5日, 帝王切開にて1483g の児を娩出した。児は ATL(-)であった。頸部リンパ節生検にてリンパ腫型 ATL の診断と確定し, 術後14日目より化学療法開始となった。(結論) 頸部リンパ節に初発したリンパ腫型 ATL により, 局所免疫から全身の免疫応答が低下したために, 日和見感染症を惹起したと考えられた。

P-446 腔内グラム陽性桿菌(GPR)不在は早産を予測する自治医大¹, 上都賀総合病院²薄井里英¹, 水上尚典¹, 大口昭英², 泉 章夫¹, 高山 剛¹, 松原茂樹¹, 佐藤郁夫¹

【目的】細菌性陰症は早産の独立危険因子であるがその核となる細菌種の検出には費用と時間がかかる。一方, 細菌性陰症では *Lactobacillus* (Lac), (グラム陽性桿菌, GPR) が不在であることが多い。腔内細菌グラム染色が早産ハイリスク妊婦の同定に有効か否かを検討した。【方法】対象は1995年1月~1996年6月間に当院を分娩前に受診し, 当院で分娩した妊婦2765名の単胎妊婦とした。これら婦人の腔内・子宮頸管内より同意を得た後, 検体を採取しグラム染色を行うと同時に1958名の検体については嫌気性培養を行い Lac の有無を確認し早産との関係について検討した。【成績】185名(6.7%)の婦人が早期早産(<33週), 309名(11.2%)は33~36週早産となり, 残り2271名は満期産となった。各群の GPR 不在率は31% (58/185), 16% (48/309), 3.8% (87/2271) であった。すなわち, GPR 不在だと8.33倍 (95%信頼限界5.88-12.5) 33週未満早産になりやすく7.14倍 (5.26-8.33) 早産 (37週未満) になりやすいという結果だった。GPR 不在を検査陽性とする33週未満早産スクリーニング検査として sensitivity 31%, specificity 95% であった。Lac 培養が同時に行われた1958検体中, GPR (+) and Lac (+) が1738検体, GPR (-) and Lac (-) が63検体で92% (1801/1958) 検体で完全に結果が一致した。【結論】腔内 Lac は早産予防に重要な役割を担っている。腔内 GPR の90%以上が Lac である。腔内 GPR の不在は早産を極めてよく予測する。腔内細菌グラム染色は検査が簡便, 安価, かつどこでも行えるので早産ハイリスク妊婦同定スクリーニング検査として臨床的有用性が高い。

P-447 腔内細菌のヒアルロニダーゼ活性に関する検討

岐阜大

早崎 容, 三嶋廣繁, 安田香子, 玉舎輝彦

【目的】腔内細菌の異常増殖が細菌性陰症を引き起こし, その一部が流早産につながる事が明らかになってきた。子宮頸管の熟化にはヒアルロニダーゼが関係することから, 細菌の分泌するヒアルロニダーゼも早産の病原因子の一つではないかと考えられる。しかしながら, 腔内細菌のヒアルロニダーゼ活性に関する検討はこれまでは認められない。【方法】検体採取および分離された細菌の研究利用の同意を文書で得て分離された代表的な腔内細菌である *Streptococcus agalactiae* 32株, *Escherichia coli* 20株, *Peptostreptococcus magnus* 28株, *Peptostreptococcus asaccharolyticus* 13株, *Bacteroides fragilis* 22株, *Prevotella bivia* 12株を対象にして, ヒアルロン酸を含む寒天平板培地を作成し, 細菌を spot inoculation することにより細菌のヒアルロニダーゼ産生の有無について検討した。【成績】ヒアルロニダーゼ活性の陽性率は, *S. agalactiae* 15.6% (5/32), *E. coli* 0% (0/20), *P. magnus* 0% (0/28), *P. asaccharolyticus* 0% (0/13), *B. fragilis* 4.5% (1/22), *P. bivia* 16.7% (2/12) であった。なお, 早産/切迫早産症例から検出された細菌では, *S. agalactiae* 55.6% (5/9), *B. fragilis* 16.7% (1/6), *P. bivia* 40.0% (2/5) とヒアルロニダーゼ活性陽性を示す株の割合が高かった。【結論】ヒアルロニダーゼは, プロテアーゼ, エラスターゼなどと比較すると早産を引き起こすには弱い酵素であると考えられるものの, ヒアルロニダーゼ活性を持つ腔内細菌の異常増殖は, 早産につながる可能性があることが示唆された。